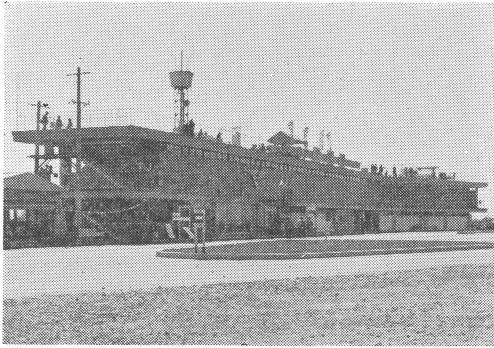


地方だより



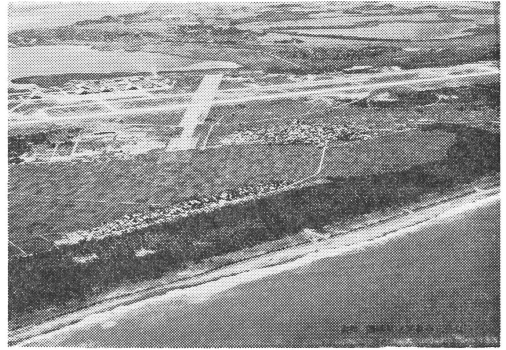
小松空港ビル全景

当分室は昭和37年10月1日付をもって金沢地方気象台下の航空官署として、正式に発足したばかりで、目下鋭意業務整備中というのが現状である。多くの方にとって小松市とは馴染みのない名と思うので、簡単に地理的位置をのべると、石川県下では金沢市につぐ商工業の盛んな都市で(9万)、能登半島の付根の西方日本海に面し、北陸本線金沢駅から車で1時間、バスで50分の所にある。東は白山を含む連山を控え、南西部は三つの湖沼に囲まれた平野にあり、金沢藩主前田利常が隠居地をここに定め各種の産業の基を固めた。北方4kmの所に勧進帳で有名な安宅の関所跡がある。戦災をうけず昔をしのばず家並が続き寺がやたらと多い。

さて分室の所在する小松空港であるが、駅西方バス10分の砂丘帯にあり、総面積412万5千平方メートルと千歳飛行場につぐ日本第2位の広さを誇り、第二次大戦中の神雷特攻基地であり、昭和35年4月から防衛庁によって民間併用を条件に工費20億円を投入し1年2カ月で完成した。この工事であらゆる工作機械がフルに使われ、旧海軍の面影は一掃され、その後には幅45m、長さ3000mの滑走路、1千平方メートルもある4棟の格納庫が出現した。現在ノースアメリカンF86Fジェット戦闘機を主力とする第6航空団の基地であり、ジェットの騒音に日夜あけくれている。民間航空関係としては空港の北側に昭和36年6月竣工のローカル空港としては豪華な鉄筋の北陸エアターミナルビルがあり、分室は2階の見晴らしのよい中央を占めている。定期便として全日空がコンペア、DC-3型機を使用し、1日2便(東京一名古屋一金沢)、(大阪一金沢)、及び日本航空が10月10日より1日1便(金沢一名古屋)をDC-3型機を使い就航している。その他小型機、ヘリコプターによる宣伝、遊覧、取材飛行が行なわれている。

何しろ近くは山代、山中温泉等を含む北陸加賀温泉郷を控えているので、旅客は観光団体客で満席状態で、席

金沢地方気象台小松空港分室



日本海より小松空港の全容を望む

手前黒々としたのは防風林で、左下方が関所跡、左上方、今江潟、木場湖、小松市街の一部。左方ほぼ中央の横に細長い建物が空港ビル。

の申し込みをことわるのも仕事の一つに入っている位である。

昭和38年には富山空港の完成、東京金沢間の直通路線の計画、又今迄冬季は北陸特有の悪天で休、欠航を余儀なくされていたが、近時航行援助施設の強化とあいまって、現在CABの航空標識業務としてNDB(無指向性無線標識)施設があり、最近GCA(着陸誘導管制施設)の正式使用認可の告示があり、悪天でも無線誘導で安全に着陸できる事になり、通年運航のみとおして、いよいよ小松空港は北陸の否、裏日本の空の中心的存在になる日も近い。

(内田 亮)



滑走路より民間側を望む

建物は空港ビル、後方小高い森は安宅の関所跡、右上方独立家屋は航空標識所(ビーコン)分室は2階中央。